

信徒講座：宣教の使命に生きる④

VI. 偉大な宣教時代(19世紀以降)

1. 近代初期

- ・ **宗教改革期の「宣教」**：宗教改革者達の関心は教会の改革であり、世界宣教は念頭になかった。
- ・ **宣教開拓者達**：オーストリアの貴族フォン・ヴェルツは、宣教の責務を訴え、宣教師を支える協会の設立、宣教師訓練学校の設立を訴えたが、反応は冷ややかだった。彼はオランダ領ギニアに渡ったが病死した。しかし彼は「一粒の麦」となり後進への道を開いた。敬虔派は宣教運動を起こした。デンマークのツイゲンバルクとハインリッヒ・プリュチャウは南インドでタミル語聖書翻訳を行い、多くの人々に授洗した。彼らを支える宣教協会が英国で生まれた。ノルウェーのハンス・エゲーデはグリーンランドでエスキモーに伝道した。ロジャー・ウィリアムズとジョン・エリオットはアメリカ・インディアンへ伝道し、そこで指導者を育てた。エリオットは「モヒカン語」聖書を翻訳した。

2. 宣教の偉大な世紀

- ・ **ウィリアム・ケアリ**：「近代宣教の父」ケアリは、クック船長の「世界航行記」を読み「異教の諸国民に福音を伝える義務」を提唱、バプテリスト宣教協会を設立した。1793年、自ら最初の宣教師としてインドに渡った。後にマーシュマンとウォードが加わり「セランポールの三傑」と呼ばれた。伝道と牧会の傍ら学校と印刷所を作り、またベンガル語聖書を出版した。
- ・ **「宣教師」という言葉と意味**：この頃から「専ら聖言の奉仕に当たるべく神に召された人々で、イエス・キリストが全くではないにしても殆ど知られていない世界の諸地域に福音を伝える為に、地理的または文化的な境界を越えて働く人々」として「「宣教師」という言葉が使われるようになった。
- ・ **「宣教協会」の誕生と働き**：ケアリの働きに触発されて、多くの「宣教協会」が生まれ、19世紀をして「偉大な宣教の世紀」と呼ばしめるような働きが進んだ。
- ・ **「偉大な世界宣教」**：アレクサンダー・ダフ、レジノルド・ヒーバーがインドへ、アドニラム・ジャドソンがビルマへ、ロバート・モリソン、カール・ギュツラフ、ハドソン・テイラーが中国へと宣教開拓者が続いた。リギンス、ウィリアムズ、ヘボン、ブラウン、シモンズが日本へ、アレンとネヴィアスが韓国へと宣教師達の働きが続いた。また、ヘンリー・タウンゼントがナイジェリアへ、ロバート・モファットが南アフリカへ赴いた。デイヴィッド・リヴィングストンは、宣教師、探検家、人道主義者として偉大な足跡をアフリカに残した。ルードウィッヒ・クラップはケニア海岸地方に宣教拠点を作った。
- ・ **自立教会設立の動き**：宣教師達の働きを補足する為に、現地での自立教会を助ける運動が起きた。「国外宣教の大きな目的は、教会を植え、増やすこと」との提案を具体化したのが韓国に遣わされたジョン・ネヴィアスの「ネヴィアス・メソッド」である。彼の提案は、①新しい信者は、その職業に留まる事、②教会組織は、現地の人々が自発的に治める力がつくまで待つ事、③教会が近隣への伝道を行う力がつくまで、専任の牧師赴任は行わない事、④現地の人々が自分達のスタイルで自分達の財力で会堂を建てる迄待つ事。ネヴィウス計画は、韓国長老教会始め多くの教会の成長要因となった。